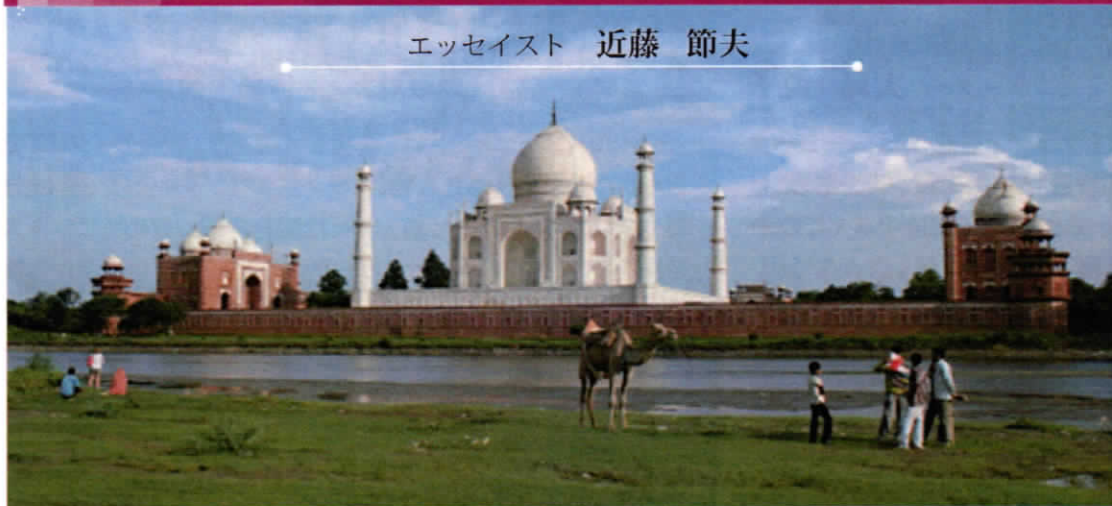


エッセイスト 近藤 節夫



ヤムナー川対岸から望むタージ・マハル

17世紀中ごろインド北西部アグラに近いヤムナー川の畔にお伽噺のような悲哀の実話に基づいて建設された、左右対称の目を眩するような白亜の建物が建っている。これこそが世界文化遺産「タージ・マハル」である。

あの時代は女性の地位が認められていなかったが、王妃ムムターズ・マハルをこよなく愛した皇帝シャー・ジャハンは、38歳の若さで冥界へ旅立った王妃が忘れられず、想いは募るばかりだった。王妃の遺言により皇帝は22年間の年月をかけて王妃の名を冠した総大理石の巨大な墓所を完成した。

歴代ムガル王朝は、王室内の権力争いが激しく、親子、兄弟であろうとも皇帝になるためには、力ある者がライバルを倒してその地位を奪うことなど、ごく普通のことだった。皇帝シャー・ジャハーンも4人の息子の権力争いの煽りを受け、挙句に3男によって近くのアグラ城に幽閉された。そのため皇帝は、アグラ城から愛する王妃が祀られたタージ・マハルを毎日眺めながら王妃を偲び、失意のうちにこの世を去り、遺体は王妃の隣に葬られた。

大楼門と呼ばれる高さ30mの大きなメインゲートを潜り抜けると、池水で4つに分けられた美しいペルシャ風の庭園の奥の正面に、イスラム建築の白亜の殿堂、タージ・マハルの威容が目に入ってくる。



「マツキ・ミヤザキ通り」の石造案内板

タージ・マハルへのアプローチはいくつかあるが、最も多くの人々が訪れるゲートは東門と呼ばれている。生憎東門の前は狭いT字路になっていて交通渋滞が激しく車の乗り入れが禁止されている。バスでやってきた観光客は、近くのバス・ターミナルで一旦観光用トロリー車に乗り換えた後、東門まで歩かされる。

日本人として知っておきたいのは、半世紀ほど前このタ

ージ・マハルに名誉あるひとりの日本人がいたことである。誇らしいことにこの世界遺産へ至る東門ロードにその日本人の名前が冠せられている。それは「マツキ・ミヤザキ(宮崎松記)博士通り」と呼ばれ、道路沿いには博士の功績を称え、説明する縦2m近い大きな石造の案内看板が建てられ、多くの観光客が立ち止まって目を留めている。

この宮崎松記博士については、残念なことにあまりガイドブックに紹介されていないため、日本人の間でもほとんど知られていない。しかし、「マツキ・ミヤザキ博士」は、インド国内、とりわけアグラ界隈では知らない人はいないほどの著名人である。

宮崎博士はインド・アグラ近郊にライ病院を建ててインドのライ病(ハンセン病)撲滅と、ハンセン病患者治療のために献身的な医療活動に取り組み、広くインド人から慕



アジア救済センター 通称「JALMAセンター」

出典: 外務省ホームページ
(mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/on_344.html)

所長室に掲げられた
初代所長 宮崎博士の写真

出典: 外務省ホームページ
(mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/on_3-4.html) をトリミング加工して作成

われ尊敬を集めていた。因みに近くにいた年輩いたインド人に博士について尋ねてみたところ、生前の博士をよく知っており話をしたこともあると言っていた。博士は、ハンセン病専門医で、1959年12月インドのハンセン病患者の実態を視察し、当時250万人いたといわれるハンセン病患者の救済を決

きれいに整備されている
初代所長宮崎博士と2代目所長の墓所

出典: 外務省ホームページ
(mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/on_344.html)

意して、アジア救済協会設立に奔走した。65年12月アグラ市にインド救済センターを完成し、所長として診療にあたった。インドでは「インド救済の父」とか、「日本のシュバイツァー」とも呼ばれている。72年6月日本へ一時帰国してインドへの帰途、不運にしてあの「日航機ニューデリー墜落事故」により帰らぬ人となった。

タージ・マハルを訪ねたら、博士を偲んでこの「マツキ・ミヤザキ博士通り」を歩いてみるとタージ・マハルが一層懐かしく身近に感じられることだろう。